

小田原史談

第17号

談会 史一丁 原一丁 小田原市 小田原市 郷土

真説曾我兄弟 (四)

中野敬次郎

九、伊東、工藤両家の和解と、その子孫

曾我兄弟の仇討事件のあった後の、伊東氏と工藤氏はどうなったか。

伊東入道祐親は多数の子息があったが、世に知られているのは、長男の河津三郎祐泰と次男の伊東九郎祐清であるが、女子は四人あって、長女は三浦介義澄の妻、次女は初代工藤祐経の妻となったのを、伊東家・工藤家の争いが表面化した後、実父祐親が奪いかえして、小早川遠平に再嫁させた娘であり、三女は北条時政夫人となり、四女は八重姫と言って、伊豆騒々小島配流中の源頼朝と恋愛に落入り千鶴丸を生んだ女性であった。

さて、河津三郎祐泰とその三子、十郎・五郎・御房丸、何れも非業の最後を遂げたので子孫が絶え、祐親直系の伊東家は、祐親の次男伊東九郎祐清の系統が続いた。祐清は父祐親が、配流中の頼朝が八重姫と通じたのをにくみ、八重姫の生んだ千鶴丸を殺し、更に頼朝をも害せんとしたが、祐清は密かに父の計画を告げて頼朝を救った恩人であるので、石橋山合戦に父が頼朝に抗して敗れて自害した後、頼朝は祐清に対しては、前恩を徳として、百方論して臣下とせんとしたが、祐清頗る高操節義の男で、父の敵となつた頼朝に仕えるのも潔しとせず、固辞して受けず京に上つて平氏に仕え、北陸道の戦いで討死してしまつた。ところが、その子孫祐光は父上洛のとき年わずかに三才であつたが、父と別れて伊豆に止まって、外祖父野宗光に養われて成人し、建久七年二月に頼朝に召されて家の旧領であつた河津庄を賜つた。その子孫は多数に分れ、或は伊東氏を称し、或は河津氏を称して今日に至っている。中には、伊東祐親の娘八重姫が頼朝と通じて妊娠したが、父の怒りにふれたので、ひそかに家を脱して薩摩に入つて浪速局と称して一男子を生んだが、その子孫河津氏を称したと伝えている家柄など、いろいろな家伝を持っているものもあるが、皆祐清、祐光父子の後裔に属するものであるようだ。祐

清の後裔は、徳川三代將軍家光のとき河津振津守隆家が召し出されて一万石を賜わり、若年寄になつたが、一体に祐清流伊東、河津氏は、鎌倉・室町・江戸の各時代に幕府とは、とかく疎遠勝で、家名はあまり振わなかつた。一方、工藤祐経の系統を見ると、祐経は後室の千葉常胤の娘との間に祐時、祐長の二男子を生んだが、祐時が「曾我物語」などによく出てくる幼名犬房丸であつた。祐経が曾我兄弟に討たれたときは、遺子犬房丸は九才で、直ちに家督を継いだ。建久九年六月二十九日、十四才のとき將軍頼朝の烏帽子親で元服して祐時と名乗り、従五位下、大和守に任じて父遺領の外に日向の國にも広い領土を与えられた。日向領は代官をして治めしめ、祐時自らは伊豆に止つて生涯を送つたが、工藤氏は改めて伊東氏を称したので、これより伊東氏には伊東祐親の子孫である祐清流伊東氏と工藤祐経の子孫である祐時流伊東氏の二派が生ずることになつた。

祐時は、父の遺領と自己の新領と合せると全国に四十カ所に近い領地があつて、頼朝幕府に親近したし、その上に十一男七女という子福者であつた。男子は嫡子祐朝、二男祐盛、三男祐綱、四男祐明、五男祐氏、六男祐光、七男祐景、八男祐頼、九男祐忠、十男某早世、十一男頼恩と言ふ。頼恩は独り僧籍に入つたが、他の男子は皆父の領土を分配されて一家を立てたので一門大いに繁栄した。六男祐光が幕府の命によつて父の跡を継いで家督して本家を守つたが、祐光の子祐宗、祐宗の子貞祐まで伊豆伊東に住したが、貞祐の子祐持に至つて、所領の日向に移つて、戸郡城に鎮した。そして、江戸時代には鉄肥城に居て城主として五万余石を食んで鎮西の有力な大名として知られた。その子孫が明治になつて伊東子爵家となつたのである。ところが、この工藤祐経の子幼名犬房丸こと、伊東祐時の夫人は土肥弥太郎遠平(後の小早川遠平)の娘であつて、祐光を初め多数の子女を産んで一門の繁栄を築いた女性であつた。

この関係はまことに微妙であつて、屢々前掲したように、伊東入道祐親の娘(河津三郎祐泰の妹)は、初め工藤祐経に嫁したが、後に祐親はこの娘を祐経のところから取りかえして土肥遠平の妻とさせたのである。

この遠平夫人の生んだ娘が、工藤祐経の子祐時の夫人となつて、祐光を生むのである。この事實は曾我兄弟の仇討とまで発展した伊東祐親一族と工藤祐経一族との怨恨が一掃されて両家の和解提携が実現されたことを意味するものに外ならない。そして両家の和解の媒介に立っているのが土肥氏であることを示している。土肥実平父子は、曾我兄弟の仇討にも援助者の中心になつており、源頼朝の挙兵や石橋山合戦の中心ともなつてゐることなどと思ひ合せると、当時の豆相武家グループが土肥氏をめぐつて動いてゐた様相が窺われて、その隠然たる力を認識する次第である。

編集部より

○読者の要望により筆者より曾我兄弟関係系図を示していただきました
○次号は好例により新年の詞号のため連載ものは十九号からとなります

(つづく)

山県有朋の晩年とその死 (1)

勝 野 憲 一

山県有朋は大正一〇年六月に八四才の誕生を迎えた。彼はなお嬰孺たるものがあつた。高橋義雄は、この年の三月に山県が藤山雷太の招宴に列席したときのことを見て「八四才の高齢に急勾配の梯子段を上下するに他人の助けを借らず、又六七間を隔つる座敷の片隅に立て並べたる金屏風の菊花の輪廓が分明に見ゆると云わるるを聞き、其老て益聰明なるに驚いたといっている。しかし、ひとり健康だけではない。同じ三月に彼は松本剛吉にむかつて東宮妃問題との関連で目下提出している辞表が聴許されたなら「己は一つ平民になつて新聞は六ヶ敷いが、金の五拾万も拵らへて権威ある雑誌をやつたら出来る」と思ふ。伊三(藩嗣子山県伊三郎)に身代を譲つても二十万位は己が出来ると思ふから、君は己の手紙を以て運動して呉れたら参拾万位は出来ると思ふ。そして「雑誌を造つて見たい」と

語つた。また、六月に三越の西館が竣工したが、その際に、山県は来賓として、石黒忠應ともなつてその各階を巡覧した。彼は屋上を上り、その塔から市中を望めた。そして求められ「天つ日に手もとどくべき心地して富士も筑波もふもとなりけり」の即吟を眼録も用いずに短冊に書き記して、三越の関係者に与えた。しかし、山県は単純な好奇心で三越見物をしたのではなかつた。彼はそれから二三日後に松本に語つて、三越をみて来たが実は「贅沓の程度驕奢の実状」をみるためであつた。「先づあの位なら未だ亡國の兆が現われて居るとも言えぬ」と述べた。

九月三日 皇太子は外遊から帰国された。かねて山県は外遊中の皇太子のことを案じ、海外での皇太子の評判がよいのをきいて少からず喜んだといわれているが、六月に巡遊中の皇太子を撮した映画が首相官邸で

政府関係者を招いて映写された節、山県もその席に臨み、身動きもせず画面をみつめながら、眼に涙を流していた。ところで、いよいよ皇太子が帰国される前日小田原の古稀庵に無名の投書があり、帰国の当日は警戒に特に注意を要する旨が記されていた。山県はこの投書を甚だ気にし、ついに深夜に入って副官と家令とを呼び、夜が明けたら監視総監および神奈川県知事に警備に遺漏ないよう伝えることを命じ、その夜は憂慮の余りほとんど一睡もしなかつた。三日の朝が明け午前一〇時になると、古稀庵にも皇礼砲の轟きがかすかに聞えて来た。それは御召艦の入港を告げるものであつた。このとき山県は、居間の縁側に出て耳に手をあて、しばらくは敬動もせず、その姿は副官吉江協中を感動させた。この日やがて訪れた松本にむかい、山県は涙を流しながら皇太子のことをいろいろと物語つた。

皇太子帰国の直後、山県は田中義一前陸相にむかつて、原首相は摂政設置後辞職するつもりと思ひ、それで甚だ困るといい、そのことを希望した。原は、笑いながら、自分も疲れたから何時辞めてもよい。ただ、摂政設置の問題を控へまた近々ワシントン会議がひらかれることでもあり、自分としても無責任な進退はしないと語つた。(続く)

旅で見た下曾我村郷土史を惜んで 星野喜久雄
下曾我村郷土史を十月二十七日東京神田神保町の古本店で見た。昭和三年刊の著者下曾我村曾我谷津長谷川揆一、印刷人足柄村井細田土屋秀男とあり、約三百頁の写真入りの菊版、ザラ紙製本で活字も大きく写真も現代のように解明なものではなかつたが場所が小田原市内のことだし何時かは行く折もあらばと土地の先覚者がどんな具合にまとめたものかと興味深くいろいろ読みしてみた。印象に残る記事は下曾我には平安朝以来の系図を誇れる五代の事や曾我兄弟の事は勿論嘉永六年の地震の事や動物誌植物誌まで出しており動物誌冒頭に猿がいると書いてあるので、ほんとかたと一瞬驚いたが備考欄に銅青とかいてあつた。高齢者が写真入りで載せてあつた。古代から当時までの記事が出ておつて政治・経済・文化・各般にわたつており面白いので一冊購入しようと思つた。裏表紙内に書いてある定価を見て驚いた。金貳千八百円也、交通費共で東京へ出かける時に二千円しか小遣を持参せぬ私であるので残念ながら見送つたが、たった一冊しかなかつた郷土の貴重な本が誰かの手に入つてしまつたかと思つて今でも後髪を引かれる思ひがする。それにしても地方郷土史の定価の高いには驚いた。小田原史談に投稿する次第。それからしばらくたつて、まさかと思つたが念のため史談会には事務局のある所の郷土文館へ問い合わせたら曾我谷津出身の市会議員長谷川実氏が昨年同じ本を一冊既に小田原にはないといつて郷土文化館へ寄贈して下さいました。

市内には未だこれに類するような古書が数々あると思ふが、個人で所有しているし又すきな人が自由に見ることも出来ないもので、市民の郷土研究のため是非こうした著書を郷土文化館のような所へ適当な値段で売るか或は寄贈するかして永久にとめて貰ひたいものだ、つくづく思つた。

極月自適 清水專吉郎
いそがしく師走の空も寒からず
八重山茶花のなほさきつき

株式会社
小田原百貨店
社長 神戸英次郎

第十七号
昭和三十七年十二月十五日発行 (毎月一回発行)
会費 (一ヶ月三百六十円)
発行人 小田原史談会
編集人 機関紙編集部
発行所 小田原市幸一丁目
郷土文化館内
印刷所 清水印刷株式会社

<p>あなたの洋品店</p> <p>はふや</p> <p>小田原幸町 TEL 2307</p>	<p>小田原信用金庫</p>	<p>きそば庵</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗</p> <p>小田原市十字二 電話五二七六番</p>
--	----------------	--------------------------------------	---

<p>高級陶器の店</p> <p>小田原市緑1~103 小田原銀座通り</p> <p>株式会社江島屋陶舗</p> <p>TEL(0465)5427</p>	<p>甘露梅 月の衣</p> <p>小田原駅前</p> <p>正栄堂菓子舗</p> <p>電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店</p> <p>花田屋</p> <p>小田原銀座2 電話 3788番</p>	<p>カメラ・写真用品</p> <p>なんでも揃う</p> <p>カメラの光輝堂</p> <p>小田原駅前TEL 5965 4859</p>
--	--	--	---

<p>プラスチック 成型加工</p> <p>東海化成株式会社</p> <p>取締役社長 滝本友信</p> <p>電話小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、パピリオドル、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店</p> <p>有限会社山一商店</p> <p>小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋</p> <p>茶利商店</p> <p>小田原市多古25 電話2341・2374</p>
---	---	--	---

<p>御料理 御弁当 仕出し</p> <p>株式会社東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>純良医薬品</p> <p>株式会社オダワラ薬局</p> <p>錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華</p> <p>松屋</p> <p>小田原錦通り 電話三三三三番六</p>	<p>松 銘菓 銘菓 千代菊 銘菓 甘露梅</p> <p>電話 2376</p> <p>銘菓(県指定の店)</p> <p>集栄堂本店</p>
--	--	---	---

<p>平野商会</p> <p>平野久雄</p> <p>小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真</p> <p>イガラシ</p> <p>小田原市幸3 TEL 2534番</p>	<p>趣味の陶器</p> <p>江島屋</p> <p>小田原箱根口 電話 6602</p>	<p>裕志澤</p> <p>TEL 3131</p>
---	--	--	-----------------------------------

<p>印刷物は</p> <p>弘英印刷へ</p> <p>小田原市井細田八一 電話四、一〇八番</p>	<p>明るい生活 楽しい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社</p> <p>代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社</p> <p>大雄山線</p> <p>運営事務所</p>
---	--	--	---